

平成 7 年の病虫害の発生と防除

農林水産省農産園芸局植物防疫課

I 夏作期間の気象経過の概要と農作物被害

平成 7 年の春はほぼ全国的に、多雨・日照不足で推移し、西日本では一昨年から続いていた渇水はほぼ解消した。梅雨入りは平年並ないし早めで、梅雨明けについては平年並ないし遅め、九州、四国、東北北部は平年より早めだった。7 月に入ると、梅雨前線の活動が活発となり、各地で大雨となった。梅雨期間の降水量は東北地方と南西諸島を除いて平年より多くなった。梅雨入り後、東北から関東、北陸地方を中心に日照時間が少なくなり、6 月は平年の 60% 以下となる地域もあり、また、気温も全国的に低かった。

梅雨明け後は、東日本、西日本では晴れて暑い日が続く、8 月の月平均気温は多くの官署で高い記録を更新した。一方、北日本では梅雨明け後も曇りや雨の日が多く、日照不足が続いた。このため夏（6 月～8 月）の気温は北日本と日本海側の一部を除いて全国的に高くなった。日照時間は、関東から日本海側を除く西日本で平年を上回り、太平洋岸では 120% 以上の所もあった。逆に、北日本と北陸から山陰にかけては平年以下、所によっては平年の 70% を下回り、対照的であった。降水量は梅雨

明け以降、関東以西の太平洋側を中心に少ない状態が続いたが、9 月以降は、各地とも若干の降雨はあり、一昨年のような深刻な渇水とはならなかった。

9 月は中旬に気温が全国的に低くなったが、10 月には全国的に高温になるなど、気温の変化が大きかった。

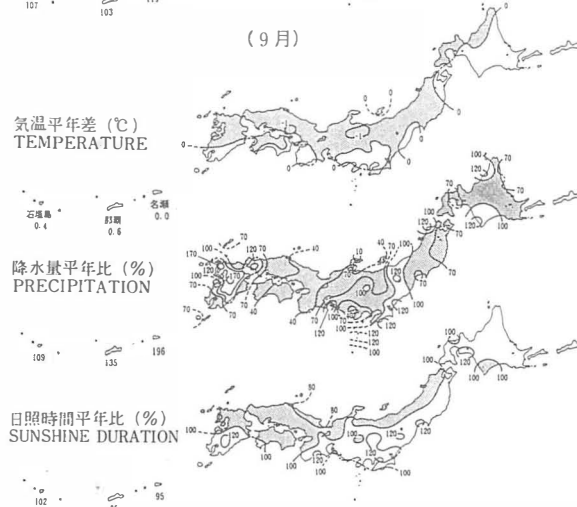
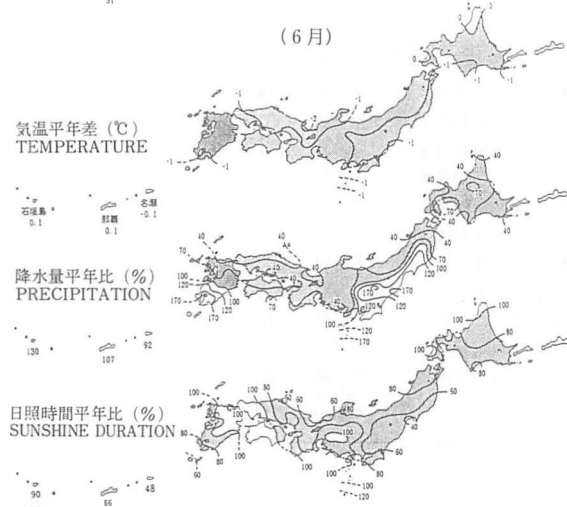
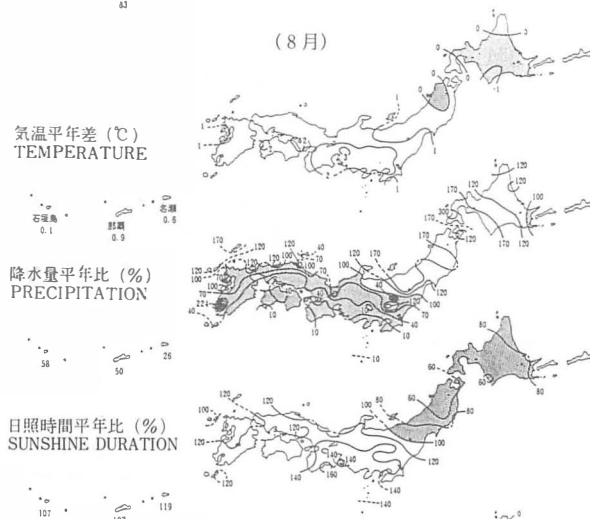
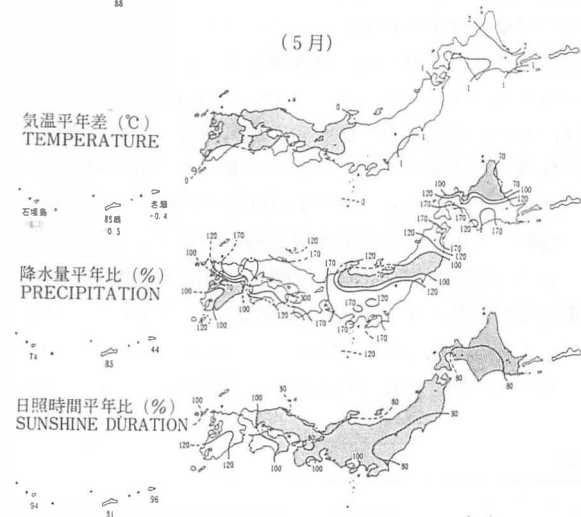
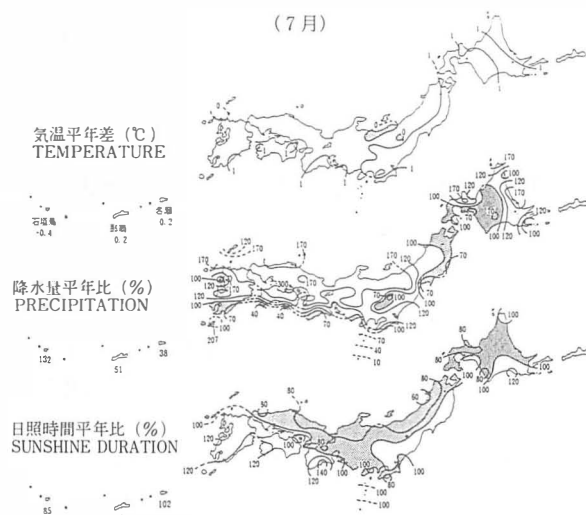
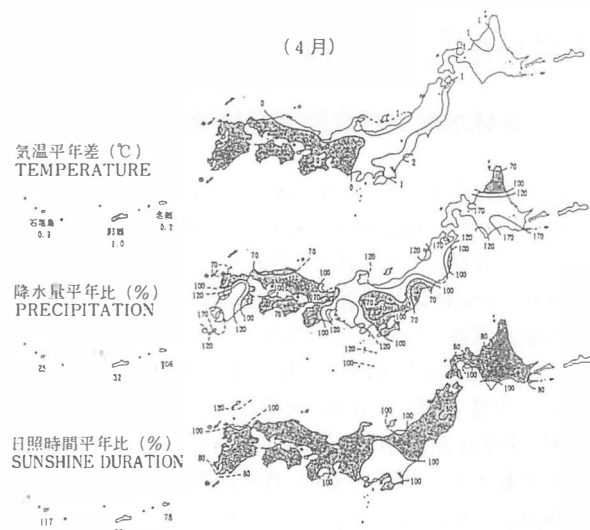
台風の発生は春（3 月～5 月）は少なく、夏（6 月～8 月）も 9 個（平年 11.6 個）と少な目であったが、9 月は 5 個（平年は 5.2 個）と、ほぼ平年並であった。9 月に発生した超大型の台風 12 号は、八丈島近海を北東上し、伊豆諸島、千葉、茨城にまとまった雨を降らせ、果樹の落果や野菜の折損が発生した。この台風による八丈島での最低気圧 932.4 hPa は、戦後東日本、北日本で記録された最も低い気圧となった。また、台風 14 号は九州に上陸、その後中国地方を縦断し、九州地方を中心に水稻の倒伏等の被害をもたらした。その他主な農作物被害は 6 月下旬～7 月下旬にかけて本州付近に停滞した梅雨前線の影響で大雨による浸冠水等の被害が発生した。

10 月 15 日現在の水稻の作柄は、日照不足等の影響で東北及び北陸ともに作況指数 96 の「やや不良」のほかは、北海道 103、関東・東山及び東海 105 の「やや良」、近畿 106、中国 107、四国 109、九州 106、の「良」であ

表 - 1 1995 年梅雨の状況

地 域	梅 雨 入 り		梅 雨 明 け		梅雨時期の降水量 (mm) 括弧内は平年比 (%)
	本 年	平 年	本 年	平 年	
沖 縄	5 月上旬前半	5 月中旬前半	7 月上旬前半	6 月下旬前半	那 覇 476.0 (94)
奄 美	5 月中旬前半	5 月中旬前半	7 月上旬前半	6 月下旬後半	名 瀬 514.5 (71)
九州南部	5 月下旬前半	6 月上旬前半	7 月上旬後半	7 月中旬前半	鹿児島 1027.0 (146)
九州北部	6 月上旬後半	6 月上旬後半	7 月上旬後半	7 月中旬後半	福 岡 611.5 (119)
四 国	6 月上旬後半	6 月上旬後半	7 月上旬後半	7 月中旬後半	高 松 416.0 (141)
中 国	6 月上旬後半	6 月上旬後半	7 月下旬前半	7 月中旬後半	呉 511.0 (110)
近 畿	6 月上旬前半	6 月上旬後半	7 月下旬前半	7 月中旬後半	大 阪 559.5 (154)
東 海	6 月上旬前半	6 月上旬後半	7 月下旬前半	7 月中旬後半	名古屋 468.0 (109)
関東甲信	6 月上旬前半	6 月上旬後半	7 月下旬前半	7 月中旬後半	東 京 356.5 (115)
北 陸	6 月上旬前半	6 月中旬前半	7 月下旬前半	7 月下旬前半	新 潟 410.0 (137)
東北南部	6 月上旬前半	6 月中旬前半	7 月下旬前半	7 月下旬前半	仙 台 263.0 (93)
東北北部	6 月中旬前半	6 月中旬前半	7 月下旬前半	7 月下旬後半	青 森 109.0 (59)

※梅雨の期間の降水量としては 6～7 月の 2 か月の降水量を示す。ただし、沖縄、奄美については 5～6 月の降水量である。広島は、庁舎移転により平年値がないため、呉の値を載せた。



月平均気温・月降水量・月日照時間の平年差 (比)

り、全国平均では作況指数102の「やや良」であり、10a当たり収量は509kgが見込まれている。

II 病害虫の発生の概要

水稻のいもち病は、春先から雨が多く、高温傾向であったことから補植用取り置き苗及び本田での初発が早かった。稲の生育が軟弱傾向であったことから全国的に葉いもちが「やや多い」から「多い」発生となった。梅雨明け後は猛暑となった東・西日本では高温抑制によりいもち病の伸展は停滞した。一方、北日本や東日本の日本海側では梅雨明け後も曇りや雨の日が多く日照不足が続く、葉いもちが移行したため、穂いちは北日本並びに北関東及び北陸の一部で「やや多」から「多」の発生となった。都道府県から発表された発生予察情報は、29道府県から警報5件、注意報延べ44件の合計49件であった。紋枯病及び白葉枯病は、一部を除き「平年並み」以下となった。

稲こうじ病は、東北、北陸、四国及び九州の一部で「やや多」から「多」の発生となった。

セジロウシ及びトビイロウシは数次にわたる飛来が観察されたが、平年並み以上の飛来とはならず、その後増殖に好適な夏期高温となったが、一部を除き「平年並み」以下であった。コブノメイガはウンカ類とともに多くの飛来があったと思われる、例年発生の多い南九州以外にも中国四国地域から近畿、北陸、東北に至る日本海側を中心に広く多発した。発生時期的に水稻の生産に影響を及ぼす多発のケースは多くはなかったが、コブノメイガに対して通常防除を行っていない地域も多く、にわかな多発が問題となった地域もあった。

ニカメイガは、近年稲わらの再利用を発生源とした多発のケースも報告されているが、一部地域で「多」から「やや多」の発生となった。ツマグロヨコバイは、一部地域を除き「平年並み」以下の発生となった。イネドロオシムシは、特に東北、関東及び北陸で「やや多」から「多」で、その他四国及び九州を除く各地で「やや多」であった。イネミズゾウムシは、一部を除き「平年並み」の発生となった。斑点米カメムシは、「やや多」から「多」の発生であった。

水稻以外の作物では、麦の赤かび病の発生が、開花期に降雨の続いた九州を中心に「やや多」から「多」の発生となった。また、サツマイモ及びダイズのはすモンヨトウの発生が、「やや多」から「多」となった。

果樹では、夏期の高温乾燥でカンキツ、リンゴを初め果樹全般及び茶のハダニ類が「やや多」から「多」であった。カメムシ類の発生がカンキツ、カキなどで「やや

多」から「多」となった。

お茶では近年増加傾向にあるチャのクワシロカイガラムシが、主要生産地で「多」の発生となった。

野菜では、はすモンヨトウ、ヨトウムシ及びシロイチモジヨトウの発生が各地の各種作物で「やや多」から「多」となった。昨年北日本で発生の目立ったアブラナ科野菜のコナガは、本年は全国的に「やや多」から「多」となった。また近年西日本を中心に多発しているイチゴうどんこ病は、各地で「やや多」から「多」の発生となった。

III 病害虫防除事業

1 ウリミバエ

奄美群島：前年に引き続き奄美群島全域において侵入警戒調査を実施した。

沖縄県：前年に引き続き沖縄群島、宮古群島及び八重山群島において侵入警戒調査及び不妊虫放飼による再侵入防止防除を実施した。

2 ミカンコミバエ

沖縄県：前年に引き続き侵入警戒調査を実施するとともに、八重山群島において誘殺剤散布による再侵入防止防除を実施した。

小笠原諸島：前年に引き続き侵入警戒調査を実施した。

3 アフリカマイマイ

奄美、沖縄及び小笠原諸島の被害の著しい野菜圃場などにおいて、マイマイ駆除剤散布による被害軽減防除を実施した。

4 アリモドキゾウムシ

平成2年に発生が確認された鹿児島県西之表市及び平成6年9月に発生が確認された同県揖宿郡山川町におけるアリモドキゾウムシについては、緊急防除の省令によりアリモドキゾウムシの寄主植物などの移動を禁止するとともに、発生地域において誘殺剤の散布、野生寄主植物の除去などを実施した。

また、奄美群島においてアリモドキゾウムシを、沖縄県においてイモゾウムシ及びアリモドキゾウムシを対象にして、不妊虫放飼実験的な根絶防除を実施した。

5 ナシ枝枯細菌病

平成7年に発生が確認された北海道のナシ枝枯細菌病については、緊急防除の省令により寄主植物などの移動の規則、消毒、廃棄を作った。

6 天敵増殖配布

果樹の重要害虫であるイセリアカイガラムシ、ルビーロウムシ、ミカントゲコナジラミのそれぞれの天敵であ

表-2 病害虫別発生・防除状況 (平成 7 年 10 月 1 日現在)

(単位: 千 ha, %)

病害虫名	概 評	発生面積 (前年比)	延べ防除面積 (前年比)	備 考
(イネ)				
葉いもち	やや多〜多	815(108)	2,014(103)	春期高温・多雨
穂いもち	北日本並びに北関東及び北陸の一部でやや多〜多	533(144)	2,634(101)	北日本の日照不足, 東・西日本の夏 期高温
紋枯病	北日本, 関東及び中国四国の一部でやや多の他は 平年並以下	751(84)	1,538(98)	夏期高温
白葉枯病	平年並以下	23(153)	76(304)	少雨
縞葉枯病	平年並以下	70(119)	—	
ばか苗病	平年並以下	41(98)	1,522(101)	
もみ枯細菌病	関東・東海及び西日本の一部でやや多〜多	111(139)	170(96)	高温
稲こうじ病	北日本でやや多〜多。その他一部地域でやや多	128(102)	48(126)	北日本の多雨・日照不足
ニカメイガ	一部地域でやや多〜多	253(85)	805(92)	越冬密度高い
セジロウンカ	北日本及び関東の一部でやや多〜多の他は平年並 以下	1,017(142)	1,376(106)	梅雨前線の停滞した北日本中心に飛 来量多
トビイロウンカ	平年並以下	202(222)	957(88)	飛来量少ない
ヒメトビウンカ	一部地域でやや多	695(88)	1,134(83)	
ツマグロヨコバイ	一部地域でやや多〜多の他は平年並以下	705(80)	1,091(92)	
イネドロオイムシ	東北・関東・北陸・東海・近畿の一部でやや多〜多	380(93)	776(94)	多雨・昨年多発の影響
斑点米カメムシ類	やや多〜多	313(83)	1,404(94)	高温
コブノメイガ	やや多〜多	752(218)	633(105)	
イネミズゾウムシ (ムギ類)	一部地域でやや多〜多の他は平年並	1,090(91)	1,097(95)	
さび病類	平年並以下	22(61)	40(83)	
うどんこ病	北海道でやや多の他は平年並	99(105)	232(119)	
赤かび病	やや多〜多	95(136)	205(106)	開花期の多雨
雪腐病	平年並以下	29(67)	89(114)	
雲形病 (ジャガイモ)	北陸の一部で多の他は平年並以下	0.5(83)	0.3(150)	
疫病 (ダイズ)	北海道・東北でやや多〜多	46(242)	425(116)	多雨
紫斑病	平年並以下	2(67)	22(110)	
ハスモンヨトウ	やや多〜多	21(100)	34(94)	高温・乾燥
ハダニ類	一部地域でやや多〜多	9(113)	3(150)	高温・乾燥
アブラムシ類 (カンキツ類)	〃	19(80)	32(91)	〃
そうか病	一部地域でやや多〜多	17(113)	87(97)	
黒点病	一部地域でやや多の他は平年並以下	49(91)	266(95)	
かいよう病	〃	9(50)	105(152)	
ヤノネカイガラムシ	平年並以下	6(86)	95(101)	
ミカンハダニ (リンゴ)	やや多〜多	67(93)	262(98)	高温乾燥
腐らん病	一部地域でやや多〜多	8(100)	106(147)	
モニリア病	平年並以下	1(50)	89(148)	
斑点落葉病	関東でやや多〜多	22(116)	441(120)	
黒星病	一部地域でやや多〜多	4(80)	459(148)	
ハマキムシ類	平年並以下	4(100)	240(110)	
ハダニ類 (ナシ)	やや多〜多	13(57)	109(71)	高温乾燥
黒斑病	一部地域でやや多〜多	3(75)	83(94)	
黒星病	〃	4(133)	132(91)	
ナシヒメシンクイ	〃	1(100)	45(90)	
ハダニ類	やや多〜多	10(91)	44(86)	高温乾燥

病害虫名	概 評	発生面積 (前年比)	延べ防除面積 (前年比)	備 考
アブラムシ類 (モモ)	一部地域でやや多～多	8(89)	51(96)	高温乾燥
せん孔細菌病	やや多～多	3(150)	27(113)	
灰星病 (ブドウ)	一部地域でやや多～多	2(200)	40(93)	
晩腐病	一部地域でやや多～多の他は平年並以下	2(200)	60(95)	
べと病	やや多～多	9(300)	76(119)	
灰色かび病 (カキ)	北日本・関東及び東海でやや多～多	2(200)	34(110)	
うどんこ病	一部地域でやや多～多	9(113)	50(100)	
落葉病類	北日本・関東及び北陸でやや多～多	5(167)	46(96)	
カキクダアザミウマ (果樹共通)	//	5(83)	23(100)	
カメムシ類 ¹⁾ (チャ)	カンキツ・カキでやや多～多	18(129)	86(102)	
炭そ病	一部地域でやや多の他は平年並以下	24(218)	77(101)	
チャノコカクモンハマキ	一部地域でやや多～多	13(37)	87(65)	
カンザワハダニ	関東・東海・近畿及び中国四国の一部でやや多～多	29(83)	105(78)	高温乾燥
(キュウリ)		8(89)		
べと病	一部地域でやや多～多	18(225)	67(112)	
うどんこ病	//	7(78)	57(112)	
(スイカ)				
つる枯病 (ハクサイ)	関東・北陸及び東海でやや多～多	5(100)	51(106)	
軟腐病	秋冬ハクサイは一部地域でやや多～多	4(100)	30()	
白斑病 (キャベツ)		3(75)	20(61)	
黒腐病	平年並～やや少	6(75)	30(77)	
コナガ	やや多～多	18(90)	73(83)	
(タマネギ)				
べと病	近畿で多、一部地域でやや多	2(67)	32(110)	
ポトリチス属菌による葉枯病 (野菜共通)	近畿及び中国四国の一部でやや多～多			
疫病 ²⁾	一部地域でやや多～多	4(100)	79(95)	
灰色かび病 ³⁾	//	8(100)	86(99)	
アブラムシ類 ⁴⁾	やや多	64(89)	326(84)	高温乾燥
ハダニ類 ⁵⁾	やや多～多	20(74)	85(82)	//
ハスモンヨトウ ⁶⁾	多	12(100)	43(84)	//
ヨトウガ ⁷⁾	多	14(100)	103(92)	//

¹⁾: カンキツ, ナシ, カキ²⁾: トマト, ピーマン, キュウリ, スイカ, タマネギ³⁾: トマト, レタス, イチゴ⁴⁾: トマト, ナス, ピーマン, キュウリ, スイカ, ダイコン, ハクサイ, ネギ, レタス, ホウレンソウ, サトイモ, イチゴ⁵⁾: ナス, スイカ, サトイモ, イチゴ⁶⁾: ナス, レタス, サトイモ, イチゴ⁷⁾: ハクサイ, キャベツ, ニンジン, ホウレンソウ

表-3 平成7年発生予察情報（警報・注意報・特殊報）の発表状況
(1) 警報・注意報（注：数字は発表月日。■は警報） (10月1日現在)

①稲			葉いもち	穂いもち	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	コブノ メイガ	その他の病害虫						
北海道				8.1				7.27-アカヒゲホソミドリメクラガメ						
東北	青森 岩手 宮城 秋田 山形 福島	森	7.20	8.1	7.20			7.21-稲こうじ						
		手	6.16, 7.12	8.3, 8.8										
		城	6.13, 7.21	8.8										
		田	7.13, 7.21	7.28, 8.3										
		形	6.8, 7.14	8.1										
		島	6.8, 7.14	7.27										
関東	茨城 栃木 群馬 埼玉 千葉 山梨 長野 静岡	城	6.30	7.13, 7.21				6.13-ニカメイチュウ 5.18-稲黄化萎縮病, イネドロオイムシ						
		木	6.27											
		馬	7.21											
		玉							7.13					
		葉	7.24						7.24					
		梨	7.12						7.28					
北陸	新潟 富山 石川 福井	湯	6.23, 7.13	7.13	7.27			7.14-斑点米カメムシ類						
		山		7.21										
		川	7.24	7.24										
		井	6.27	7.19										
		東海	岐阜 愛知 三重	阜					7.10	7.24				
				知						7.21				
重				7.17										
近畿	大阪 奈良			阪	7.21	8.8								
				良	7.13	7.13								
				中国・四国	広島 香川 高知	島								
		川	7.6			7.6								
		知	6.29			6.29								
		九州	福岡 佐賀 長崎 熊本 大分 宮崎 鹿児島			岡							7.26 8.1 7.18 7.10 7.14, 7.28	9.1-斑点米カメムシ類
賀														
崎														
本	6.30			6.30										
分	7.6			7.6										
崎				6.21										
島		6.26												
			②畑作物（稲を除く）			③果樹（茶を含む）								
北海道			5.15-小麦うどんこ病 7.4-ばれいしょ疫病, 麦赤かび病											
東北	青森 岩手 福島	森	6.28-ばれいしょ疫病			5.26-りんご黒星病								
		手				7.26-りんご斑点落葉病								
関東	栃木 千葉 神奈川 山梨 長野 静岡	木	8.28-各畑作物のハスモンヨトウ			6.15-ナシ黒星病								
		葉	9.6-各畑作物のハスモンヨトウ											
		川	8.28-各畑作物のハスモンヨトウ			6.30-茶もち病, 8.31-茶のカンザワハダニ								
		梨				6.6-ぶどうべと病								
		野	9.14-ダイズのシロイチモジヨトウ・ハスモンヨトウ			5.8-りんご腐らん病								
		岡				5.12-茶のクワシロカイガラムシ								
						9.14-茶のクワシロカイガラムシ								

			②畑作物（稲を除く）	③果樹（茶を含む）
北	陸	新潟		3.1-ナシ黒斑病
東	海	愛知 三重	9.12-ダイズのハスモンヨトウ 9.12-ダイズのハスモンヨトウ	7.4-中晩柑類カンキツかいよう病, 9.12-茶のカンザワハダニ, 海 9.12-カキ, カンキツのカメムシ類
近	畿	滋賀 兵庫 奈良 和歌山	8.31-ダイズのハスモンヨトウ 9.22-ダイズのシロイチモジヨトウ・ハスモンヨトウ	7.26-ぶどうべと病 5.24-ナシ黒斑病 9.25-カキのカメムシ類 9.12-カキ, カンキツのチャバネアオカメムシ
中国・四国		鳥取 山口 徳島 香川 高知	9.4-ダイズのハスモンヨトウ 9.5-ダイズのハスモンヨトウ 5.1-麦赤かび病	4.6-ナシのハダニ類, 4.26-ナシ黒斑病 9.8-カキ, カンキツのカメムシ類 4.6-果樹のクワゴマダラヒトリ, 5.1-ももせん孔細菌病 9.28-果樹カメムシ類
九	州	福岡 佐賀 長崎 熊本 宮崎 鹿児島	4.24-麦赤かび病 8.17-ダイズのハスモンヨトウ 4.20-麦赤かび病 4.14-麦赤かび病	9.1-カンキツ, ナシ, カキのカメムシ類 3.23-茶のカンザワハダニ, 8.28-ナシ, カキ, カンキツのカメムシ類 8.29-カキ, カンキツ, キュウイフルーツのカメムシ類 5.2-茶のクワシロカイガラムシ 8.31-カンキツ, ナシ, カキのカメムシ類
沖		縄	8.3-さとうきびのアオドウガネ	9.6-マンゴーのマンゴーカタカイガラムシ
			④野菜（花き類を含む）	
東	北	宮城	6.29-野菜, 花き全般のミカンキイロアザミウマ	
関	東	栃木 千葉 東京 神奈川 山梨 長野 静岡	8.28-各野菜のハスモンヨトウ, 9.6-野菜のハスモンヨトウ 8.17-各野菜のハスモンヨトウ 9.21-野菜, 花きのマメハモグリバエ, ナモグリバエ, ハスモンヨトウ 6.30-スイカつる枯病, 炭そ病 9.5-野菜, 花きのハスモンヨトウ 6.16-トルコキキョウ, バラのミカンキイロアザミウマ 9.14-キク, ネギのシロイチモジヨトウ, ハスモンヨトウ	
東	海	愛知 三重	9.12-キャベツ, ネギのシロイチモジヨトウ, ハスモンヨトウ 9.12-野菜, 花きのハスモンヨトウ	
近	畿	大阪 奈良 和歌山	4.11-たまねぎべと病, 4.14-たまねぎべと病, 9.14-野菜, 花きのシロイチモジヨトウ, ハスモンヨトウ, ヨトウガ 9.22-野菜のシロイチモジヨトウ, ハスモンヨトウ 9.22-野菜のシロイチモジヨトウ, ハスモンヨトウ	
中国・四国		鳥取 山口 香川	9.4-野菜のハスモンヨトウ 9.5-野菜, 花きのハスモンヨトウ 7.12-イチゴうどんこ病	
九	州	福岡 長崎 大分 宮崎 鹿児島	7.12-イチゴうどんこ病 9.1-イチゴ萎黄病, 炭そ病 7.14-イチゴうどんこ病 6.29-イチゴうどんこ病, 8.29-ナス, キク科等の野菜, 花きのマメハモグリバエ 1.27-イチゴうどんこ病	

(2) 特殊報 (数字は発表月日)

			①普通作	②果 樹
東 北	宮 城		3.15-稲かさ枯病初確認	
関 東	茨 城 群 馬 千 葉 東 京 神奈川 長 野		3.2-ダイズわい化病初確認 3.23-イネ褐条病初確認	8.18-キウイフルーツのキウイヒメヨコバイ初確認 7.14-キウイフルーツのキウイヒメヨコバイ初確認 5.17-キウイフルーツのキウイヒメヨコバイ初確認 9.27-リンゴ葉腐病初確認 9.28-シキミのクスアナアキゾウムシ初確認
東 海	三 重			5.16-ナシ疫病広範囲で発生
中国・四国	岡 山			8.3-カキのカキサビダニ初確認
九 州	福 岡 鹿 児 島			4.4-ブドウ (巨峰) 根頭がんしゅ病初確認 5.23-ブドウ枝枯菌核病初確認
沖	縄			8.3-マンゴーのドウガネブイブイ初確認 8.3-マンゴーのマンゴーカタカイガラムシ初確認
			③野菜	④花き類
東 北	岩 手		9.25-ナスのミカンキイロアザミウマ初確認	
関 東	栃 木 千 葉 東 京 神奈川 山 梨 長 野		6.20-トマトのトマトサビダニ初確認 6.16-ピーマンのトマト黄化えそウイルス初確認 4.3-トマトのトマトサビダニ初確認 1.18-トマトのトマトサビダニ初確認 7.3-ナスのシロイチモジヨトウ初確認 4.28-パセリー根くびれ病初確認	7.3-キクのシロイチモジヨトウ初確認東
北	陸 新 潟 石 川		7.4-キュウリ, ナスのミカンキイロアザミウマ初確認 9.19-メロン, トマトのミカンキイロアザミウマ初確認	
東 海	岐 阜		9.25-ネギのシロイチモジヨトウ初確認	
近 畿	滋 賀 京 都 大 阪 兵 庫 奈 良		6.12-セルリー, トマトのマメハモグリバエ初確認 6.26-トマトのマメハモグリバエ初確認 7.31-タチオランダゲンゲ, カラスノエンドウのアルファルファタコゾウムシ初確認 6.15-レンゲのアルファルファタコゾウムシ初確認	6.26-キク (施設) のミカンキイロアザミウマ初確認 5.15-バラのミカンキイロアザミウマ初確認 1.20-バラ (施設) のミカンキイロアザミウマ初確認
中国・四国	鳥 取 島 根 広 島 徳 島 香 川 愛 媛		8.24-ピーマンのミカンキイロアザミウマ初確認 6.6-カラスノエンドウのアルファルファタコゾウムシ初確認 5.29-シロツメグサ, レンゲのアルファルファタコゾウムシ初確認 7.7-レンゲのアルファルファタコゾウムシ初確認	8.24-バラのミカンキイロアザミウマ初確認 4.18-花きのミカンキイロアザミウマ初確認中 7.4-キクのミカンキイロアザミウマ初確認 5.19-バラのミカンキイロアザミウマ初確認 5.15-キクのミカンキイロアザミウマ初確認 1.6-バラ (施設) のミカンキイロアザミウマ初確認 6.15-ガーベラのマメハモグリバエ初確認
九 州	福 岡 熊 本 鹿 児 島		7.4-トマト茎えそ細菌病初確認 2.16-ピーマンのミカンキイロアザミウマ初確認 5.2-オクラ黒根病 5.23-ピーマンのミカンキイロアザミウマ初確認	5.23-キク, カーネーションのミカンキイロアザミウマ初確認

るベダリアテントウムシ、ルビーアカヤドリコバチ、シルベストリコバリの増殖配布を前年に引き続き静岡、岡山、長崎の各県でそれぞれ実施した。

IV 農林水産航空事業

本年度の農林水産航空事業の農業関係実施延べ面積は、4,395 千 ha（対前年度比 96.7％）となった。

本事業の基幹である水稻部門の防除実施面積は 1,328 千 ha、前年度比 95.3％となった。いもち病が多発した東北地方の 4 県では、18 千 ha 余りのいもち病の緊急追加防除が実施された。農薬の剤型別散布面積の構成比は、液剤散布 45.5％、液剤少量散布 12.4％、微量散布 38.5％、微粒剤散布 0.6％、粒剤散布 3.1％であった。

果樹部門では、リンゴの野そ駆除、クリの害虫防除など 4.6 千 ha（同 83％）であった。

畑作部門では、ダイズ、ムギ、サトウキビ等の害虫防除など 18.9 千 ha（同 89％）であった。

畜産部門では、牧野の施肥など 3.1 千 ha（同 101％）であった。

ミバエ等部門はミバエ類の侵入防止防除等が行われ、3,040 千 ha（同 97％）であった。

無人ヘリコプターによる防除実績は、本年度水稻 110.1 千 ha、コムギ及びダイズ等 0.4 千 ha、計 111 千

表-4 平成 6 農薬年度農薬出荷状況（推定）
（単位：t, kl, 百万円, ％）

用 途		6 年度出荷 （実績）	平成 7 年度（推定）	
			出 荷	対前年比
殺虫剤	数量	152,213	152,000	100
	金額	142,556	141,000	99
殺菌剤	数量	106,498	103,000	97
	金額	105,506	101,000	96
殺虫殺菌剤	数量	53,313	51,000	96
	金額	31,327	30,000	97
除草剤	数量	125,591	116,000	92
	金額	127,955	127,000	99
その他	数量	26,230	22,000	96
	金額	13,209	13,000	98
合 計	数量	463,845	444,000	96
	金額	420,553	412,000	98

ha となった。

V 農薬の出荷状況

平成 7 農薬年度（平成 6 年 10 月～平成 7 年 9 月）における農薬の出荷は、前年度に比べ数量では 4％減の 444 千 t・kl、金額では 2％減の 4,120 億円程度と推定される。

新 刊 紹 介

「作物病原菌研究技法の基礎―分離・培養・接種―」
大畑貫一・荒木隆男・木曾 皓・工藤 晟・高橋廣治 編
B 5 判, 342 ページ
定価 8,200 円, 送料 340 円
日本植物防疫協会 発行

本書の序文の中で梶原理事長は、「植物病理学の実験法の「コツ」を、今のうちにまとめておかなければと思ひ、本書の出版を計画した」と書いておられるが、大畑氏ら 5 名の編者たちは、どうやら理事長以上に熱くなったらしい。111 名もの最適の著者を発掘し、びっくりするような好著を仕上げてくれた。これだけ内容の豊富な実験法の本は恐らく未だ嘗ってなかったし、これからも中々現れないのではなからうか。なにしろ 185 種類という膨大な数の病害が取り上げられ、そのそれぞれについて、必ず自分で何十回も何百回も扱ったことのある人が、かゆい所に手の届くような書きぶりで、その分離、培養、接種などのコツを教えてくれる。考えてみると私自身、自分では野菜から果樹までずい分広い範囲の病害を 20 年も 30 年も扱って来たと思っているが、さてこの

本にあるように分離・培養・接種までのコツを熟知している病気が何種類あるだろうかと指折ってみると、意外と多くないことに驚く。恐らくこれはどんなベテラン病理学者でも同じに違ひない。

ところが本書では、一冊にこれだけはだれにも負けないう人を 111 名も集め、イネ、畑作物、野菜、果樹まで 185 種類もの細菌病、糸状菌病について懇切にしかも極めて分かり易く記述してくれている。まことに豪華である。ここに集められた「コツ」は、何十年経っても決して古くはならず、むしろ分子生物学的研究や精密な分析的研究が進めば進むほど、その基礎として必要な部分であり続けるに違ひない。

いきなり各論ばかりに眼を奪われてしまったが、大畑氏の執筆になる総論も、この部分だけで優に一冊の本の価値がある内容である。しかも各論のあらゆる部分で、これが引用されており、両方があって初めてこれだけ膨大な内容が、B 5 判, 342 頁というコンパクトな書物にまとまったという仕組みになっている。

とにかく良い本である。宣伝する必要は毛頭ないが、一人でも多くの人に、その存在を知って頂くために、喜んで一文を認めた次第である。

（東京都立立川短期大学長 岸 國平）